藤原義孝集注釈（一）

A Commentary on *Fujihara-Yoshitaka-Shu* (1)

呉羽　長
Susumu KUREHA

（一九九六年九月一二日受理）

凡例

一・『藤原義孝集』本文の引用は、『私家集大成第一巻中古Ⅰ』（昭四八・一一、明治書院）の「義孝」に収められたものを底本とした。これは、九州大学所蔵細川文庫本『藤原義孝集』を翻刻し、詞書について読点を付したものである。なお、同写本では収載歌を、上句（第三句まで）・下句と二行に分けて掲げているが、『私家集大成』に翻刻・収載する際、上句と下句で改行せず両者の間に一マス分空白を施すにとどめている。同写本は、在九州国文資料叢書４『藤原道信集・藤原義孝集・めのとのふみ』（昭五四・七）及び高橋正治氏『校本藤原義孝集目録』（昭六一・四、新典社）に影印されている。本稿でも、本文掲出にあたりこれらの影印版を随時参照した。

一・校異は、今井源衛氏「正安本「義孝集」翻刻と校異」（『語文研究』第六・七号、昭三一・一〇）・目加田さくを氏「校本義孝集」（『大鏡論』昭五四・四、笠間書院）・高橋正治氏『校本藤原義孝集目録』・田坂憲二田坂順子氏編著『藤原義孝集本文・索引と研究』（昭六二・一二、和泉書院）のそれぞれに掲げられた校異を踏まえ、諸本を一類本・二類本と分けて示した。この分類は、前掲田坂憲二田坂順子両氏の編著におけるそれにならったものである。別に高橋正治氏は二類本を、書陵部蔵正安本・同甲本と、同乙本・同丙本の二系統に分けて計三系統とされている。本稿では、二類本内の二系統の隔たりが一類本と二類本との間の隔たりほど顕著なものと認められないこともあり、二系統に分けて示すこととした。対照する本文は以下の通りである。

一類本　榊原本　清泉女子大学蔵阿波国文庫旧蔵本　群書類従本
　　京都大学蔵本

二類本　書陵部蔵正安本　同甲本　同乙本　同丙本

これらのうち、榊原本・清泉女子大学蔵阿波国文庫旧蔵本はそれぞれ、日本古典文学会『榊原本私家集（一）』及び高橋正治氏『校本藤原義孝集目録』にその影印版が掲げられており、それらをもって確認した。

一・【校異】における異文の掲出は、音の同じものは原則として掲げない。傍点を施した文字の下の（　）は、それの前の傍点の文字に添えられた傍

書であることを示す。

一・底本は本文に傍書が付されているが、両者はもともとそれぞれが本家集の一本であったものであり、撰出時期を異にするものと認められる。つまり、傍書では義孝生前の官職名が残されていることから、生前の義孝が自ら家集編纂の意図によってまとめたものか、彼の個々の歌が反故としてあったものを集めたものかと考えられる。そのいずれとは明確に判断できないが、二十一歳で生を閉じる義孝が自撰の意志を持っていたことには蓋然性が少なく、後者であるものとして考えたい。これに、義孝死後編集を加えられることがあり、それが傍書本文の系統とは別に底本本文部分として伝わったと考えられる。この底本本文部分はそこに示される官職名から天延四（九七六）年四月から六月の撰と見なされ、義孝の弟義懐がその編に与った可能性が高い。これらに対して二類本は、詠歌等の吟味から、義孝自詠・義懐改撰から後隔たった折の成立と見なされる。（以上についての詳細は、拙稿「『藤原義孝集』の成立と伝流」『北陸古典研究』第四号、平元・九を参照されたい。）これらの数次にわたる改撰による歌風の変化等については、随時【語釈】【評】に示す。

一・【語釈】【参考】に引用する和歌等は、『新編国歌大観』所収の本文による。同書以外から本文を引用する場合は随時にその依拠文献名を示す。

一・本学部紀要においては一教官の投稿原稿の長さに制限があり、本稿では当該『藤原義孝集』1～17番の歌についての注釈を掲げるにとどめた。

藤原義孝集

【校異】〔一類本〕義孝集（清）　〔二類本〕義孝朝臣集（正）　義孝集（甲・乙・丙）

源修理のかみのいへに、かたゝかへにいきてあるにまくらいたしたるつゝみかみに（これたゝ）

1拾つらからは人にかたらむしきたへの　まくらかはしてひとよねにきと

【校異】〔一類本〕○かみ（これたゝ）の　かみこれたゝの（榊・清）　かみの（群）　○拾　ナシ（群）　〔二類本〕○源修理のかみ（これたゝ）の源すりのかみの（正・甲）　これたゝのすりのかみの（乙・丙）　○いへに　家にて（正・甲）　いゑに（乙）　○いきてあるに　いきたるに（全）　○まくら　枕を（正・甲）　○いたしたる　いたしたるかへすとて（正）　○つゝみかみに　つゝみか（たる）みに（正・甲）　返かみに（乙・丙）　○拾　ナシ（乙・丙）

【語釈】○**源修理のかみ**　修理のかみ（大夫）は修理職（内裏の造営・修理を司る役所）の長官、源惟正は延喜六（九〇六）～天元三（九八〇）・四・二九。天慶八（九四五）・四・十八昇殿以来、左兵衛権少尉・同大尉・東宮蔵人・信濃守・播磨介・東宮大進・東宮亮・蔵人頭・右中将・修理大夫・右兵衛佐・参議・近江権介・備前守・大和権守などを歴任（『公卿補任』による）。義孝より二十五年年長、花山院東宮時代に東宮亮を勤める。そのことが花山院の外祖父伊尹の息義孝と結び付ける一因となったか。また惟正は安和三年九月二十日から天禄四年七月二十六日まで右近中将であり、義孝が右少将に任じた天禄二年から卒する天延二年九月まで右近衛府で義孝の上司であった。惟正が修理大夫の職にあるのは天禄三（九七二）年閏二月二十九日から天元三年四月二十九日の卒日まで。　○**かたゝかへ**　他出の際目的地が陰陽道で忌むべき方向に当たっている場合、前夜に別の方角に行って泊まり、改めて目的の場所へ行くこと。　○**つつみかみ**　枕を覆って紙によるよごれを防ぐ紙のことか。義孝は枕を出された時に、包み紙をはぎ取りそこに偽装の恋の歌を書いて贈ったのである。正安本では、「枕をいたしたるかへすと

て」とあるが、枕を返すのは翌朝のことになり、時宜として不適切になる。なお、枕の「つつみかみ」については、『建礼門院右京大夫集』第一四六番歌詞書に「事おこせつつ、人のもとへ行きなどせしに、「主つよく定まるべし」など聞きし頃、なれぬる枕に、硯の見えしをひきよせて、書きつくる」（糸賀きみ江氏校注新潮日本古典集成『建礼門院右京大夫集』による）という例があり、ここで歌を書いた「枕」とは枕の包み紙のことをさすものと思われる。 ○**つらからは** 「つらし」は態度・仕打ちなどが冷たい、薄情だ、すげない、の意。私につれないことがあれば。ちなみに新日本古典文学大系『拾遺和歌集』（小町谷照彦氏校注）の当該歌訳では、「あなたが冷淡で、苦しくてたまらなくなったならば」として、自らの心のありようをも表現するものとしている。 ○**しきたへの** 枕詞、共寝のために敷くタエ（栲）の意で、「床」「枕」などに懸る。『古今和歌六帖』には「いかばかりおもふいもをかしきたへのまくらかたさりゆめにみえつる」（三二三〇）、「いもをこひわがなくなみだしきたへの枕とほりて袖さへぬれぬ」（三二三六）など数例がみえる。 ○**まくらかはして** 同衾したことを示す。

【題意】 源修理の大夫の家に方違えに行っていた際、枕を出したその包み紙に

【歌意】 あなたが私につれないことがありましたら、人に語ることにしましょう。今日この邸であなたと枕を交わして一晩共寝をしたということを。

【評】 新日本古典文学大系『拾遺和歌集』の当該歌脚注では、「方違えに行った家の枕に、女性によそえて戯れ書きをしたのである。」とある。自分を女性によそえたのか、あるいは家の主を女性によそえたのか解に迷うところであるが、後の仮構の返しの歌の3番などは女が詠んでいることでもあり、相手を女性によそえた贈歌とみておく。この歌が『拾遺和歌集』にとられたのは、家集の冒頭歌であったということも作用したものと思われる。この家集冒頭に本歌が位置するのは、後の2・3番歌の返しの妙が際だっており、義孝もしくは他の撰者が1～3番の贈答歌をまとめて冒頭に置いたことによると思われる。

【参考】『拾遺和歌集』巻第十八雑賀、一一九〇に入集、詞書「修理大夫惟正が家に方たがへにまかりたりけるに、いだして侍りける枕にかきつけ侍りける 藤原義孝」。『拾遺抄』巻第九雑上、四四九の同歌には、「修理大夫惟正が家にかたたがへにまかりけるに、いだして侍りけるまくらに、つとめてかへるとてかきつけ侍りける 少将義孝」と詞書がある。この歌の詠歌の事情は、私撰集の『続詞花和歌集』巻第十七雑下、八一〇の歌（『藤原義孝集』3番歌）詞書からもうかがえる（3番歌の【参考】参照）。『新時代不同歌合』一二七、『後六々撰』一一六にも入集。

返し

2 あちきなやたひのやとりをくさまくら かりならすとてさためたりとか

【校異】〔一類本〕○たりとか たりとは（群） 〔二類本〕○かえし 返（正・甲） ○かりならすとて かりならすして（全） ○たりとか なりなん（正・甲）

【語釈】○**あちきなや** 相手の行為等が常識をはずれ、苦々しい、なさけない。ひどい。 ○**くさまくら** 草を結んで作った旅寝の枕。「たび」などに懸かる枕詞。ここでは前句「たひのやとりを」を受けて「かりならす」を導く。 ○**かりならすとて** かりそめのはかない恋ではないものと。

【題意】 返しの歌

【歌意】 こまったおっしゃりようです。一夜の旅の宿りでいらっしゃるのに、そんな二人の仲をかりそめの恋でないものとお考えになっておられるのでしょうか。

【評】 1で義孝が相手を女性によそえて歌を送ったのに対して惟正が贈ら

れた女性として返歌したもの。仮の泊まりという点から、一夜の仮構の出会いを深い恋として詠みかけた義孝の趣興をそらしている。

あかすおほえしかは、人に、かくなんありし、これか返事せよといひしかは、かくはいかゝとて

3　かたるともたかなはたゝしなかゝらぬ　こゝろのほとや人にしられん

【校異】〔一類本〕○おほえしかは　おもほえしかは（群）　○かくは　ナシ（清）　〔二類本〕○おほえしかは人に　おほゆれと（正・甲）　○かくなんかうなん（乙・丙）　○ありし　ありしと（正・甲）　○これか返事せよといひしかは　これかへしせよといひしかは（正・甲）　返しせよとていひたりしかは（乙・丙）　○かくはいかゝとて　かしらはいかにとて（正・甲）　ナシ（乙・丙）

【語釈】○**たがなはたゝし**　「こひしなばたがなはたたじ世の中のつねなき物といひはなすとも」（『古今和歌集』巻第十二恋歌、六〇三）という先行歌例がある。　○**なかゝらぬ**以下　逆に一夜共に寝たと語っては、却って心短さが知られましょう、の意。

【題意】　返しの歌がおもしろく思われたので、ある女に「このようなこと（歌の贈答）がありました。この私の歌にあなたなりの返事をしてみなさい」といったところ「私はこうはよみません」といって

【歌意】　一晩の共寝をみなに語り広めたとしてもことさら私のことはうわさにはなりますまい。むしろそれを語り広めたあなたの心の短さが皆に知られることでしょう。

【評】　1～3で一つのまとまり。義孝による仮構の恋の贈歌とそれに対する二様の返歌にそれぞれの返しの妙が表現される。2の惟正の返歌が方違えの客と主の関係という発想からのものであるのに対し、3番歌では別様に仮の恋の状況に浸り贈歌の表現から情愛の浅さを読みとるところに切り返しの妙をみせている。

【参考】『続詞花和歌集』巻第十七「雑中」八一〇に入集。詞書「義孝少将修理のかみこれたかが家にかたたがへにまかれりけるに、いだしたるまくらにかけりけるうた、つらからば人にかたらむしきたへのまくらかはしてひとよねにきと、これが返しのあかずおぼえければ、又人に、これがかへしせよといひ侍りければよめる　読人しらず」とある。

あきのゆふくれ

4　あきはなをゆふまくれこそたゝならね　おきのうはかせはきのしたつゆ

【校異】〔一類本〕ナシ　〔二類本〕あきのゆふくれ　あきのゆふくれに（全）　なを　猶（全）

【語釈】○**ゆふまくれ**　夕方ほの暗くなってよく見えない頃。この語を新日本古典文学大系本『詞花和歌集』（工藤重矩氏校注）脚注では『藤原義孝集』の本歌が初例とする。　○**おきのうはかせ**　荻の上を吹きわたる風。○**はきのしたつゆ**　萩の下葉に宿る露。

【題意】　秋の夕暮

【歌意】　秋はやはり夕暮の頃が並々でない興趣があり身にしみる。荻の上を吹きわたる風の音、萩の下葉に宿る露の玉の姿など、あわれ深さがきわだっていることだ。

【評】　秋の風趣の極致を夕暮の「荻」と「萩」、「上風」と「下露」の対比的景物の組み合わせによって表現する。この下句は対として秀逸であり、『栄花物語』「とりべ野」や『平家物語』巻第十「藤戸」などに引用されている（日本古典文学大系『和漢朗詠集　梁塵秘抄』中の川口久雄氏による本歌補注参照）。

左の【参考】に掲げた『撰集抄』では、義孝十三歳の折、この歌の下句を

義孝が連歌として詠み返したことになっており、1～3の秀逸の贈答に続いて家集の始めに置かれることから、やはり義孝詠歌の最初期のものと想定される。

【参考】『和漢朗詠集』「上　秋」二二九「秋興」として入集。『撰集抄』八には「昔一条院摂政の御本にて。人々連歌し侍るに。　秋はたゝ（なをイ）夕ま暮こそたゝならね　と云句の出来たりけるを。人々声々に詠して。度々になり侍けれとも。付る人も侍らさりけるに。摂政殿の御子に義孝少将とて。十三に成賜けるか。　荻のうは風萩のした露　と付給へりけれは。殿大に御感有て。是をはうちこめては有へきかとて。又の日此小冠しかしか仕侍りとて。御堂殿へ。かくと聞え奉給に。こと成御詞もなく。猶さりかてらに。返返面白侍と計そ申させ給へりける。」とある（「義孝の返歌の事」、『続群書類従』第三十二輯所収）。尾崎雅嘉『百人一首一夕話』もこの記事を引く。

また「夕まぐれ」と「荻の風」の取り合わせは後の「夕まぐれをぎふくかぜのおときけばたもとよりこそ露はこぼるれ」（『千載和歌集』巻第四秋上二六六、藤原季経朝臣）、「我が恋はいまをかぎりとゆふまぐれ荻ふく風のおとづれて行く」（『新古今和歌集』巻第十四恋四、一三〇八、俊恵法師）などにみられる。

5　つゆくたるほしあひのそらをなかめつゝ　いかてことしの秋をくらさむ

【校異】〔一類本〕○つゆくた（むすふ）る　露くたる（群）　露結ふ（京）〔二類本〕○（詞書トシテ）又（正・甲）　○つゆくた（むすふ）る　つゆくたる（正・甲）　つゆくたす（乙・丙）　○くらさむ　すくさむ（正・甲）

【語釈】○**つゆくたる**　夜露が天から降りる。○**ほしあひ**　七夕の夜牽牛・織女の二星が合うこと。　○**秋をくらさむ**　今年の秋をどうやって過ごしていこうか。一類本「くらす」は、二類本「すくす」とともに「月日を送る」の意があるが、「くらす」の場合「日の暮れるまで時間を過ごす」の原義から、不安定で孤独な秋の夜の一時一時を過ごす具体的イメージがある。

【歌意】　露が涙の如く降りて織姫彦星が会う空を眺めながらひとり私はどのように今年の秋を生きていこうか。

【評】　愛すべき対象を求めて得られぬ孤独の愁いを秋冷の夜空の二星に託して詠じたもの。「いかてことしの秋をくらさむ」という熟しきらぬ思惟的な詠みぶりには若さゆえの浪漫が感じられる。傍書の記述から最初の形は対象をそのまま捉える「つゆむすふ」であったことが想定される。「くたる」とあることで、それが天から降りる二星の逢瀬を暗示する。またそれは若い義孝の身内の捉えどころのない悲しみの表現でもあったか。前歌と同様義孝初期の詠歌であろう。

【参考】『夫木和歌集』巻第十、三九八八にも採られる。詞書は「家集秋歌中」、初句「露くたす」。

殿やみたまひしころいかゝと人のとひたるに　天禄三年の秋女のかりやるイ

6　詞ゆふくれのこしけき庭をなかめつゝ　このはとともにおつるなみたか

【校異】〔一類本〕○天禄三年の秋女のかりやるイ　ナシ（群）　天禄三年の秋女のかりやる（本文ニ続ケテ同ジ大キサデ記ス）（榊・清・京）　○詞ナシ（群）　○ゆふくれ（まくれ）の　夕くれ（まくれイ）の（清）　ゆふくれの（群）夕ま暮（京）　○庭を　庭の（京）　○おつるな（ふるなみたかな）みたか　おつる（ふるイ）涙か（なイ）（清）　おつるなみたか（群）ふるなみたかな（京）　〔二類本〕○殿　大殿の（正・甲）　○やみ　なやませ（全）　○いかゝと人のとひたるに　いかゝと人のいひたりしに（正・甲）いかゝとゝひたりし人に（乙・丙）　○詞　ナシ（全）　○ゆふくれ（まくれ）の　ゆふくれの（正・甲）　ゆふまくれ（乙・丙）　○庭　やま（正・

甲）○おつるな（ふるなみたかな）みたか　おつるなみたかな（正・甲）

【語釈】○殿やみたまひしころ　【参考】に挙げた『栄花物語』の記述から、伊尹の逝去の直前の天禄三（九七二）年九月のことと考えられる。伊尹は「水をのみきこしめせど」とあるように、水ばかりを飲む症状の病気で苦しんでいた。この時義孝は十九歳。　○こしけき　木が茂っているさま。

【題意】父君の摂政殿がご病気であられた頃、「いかがですか」とある人が尋ねたので　（異本　天禄三年の秋女のもとに送る）

【歌意】夕暮どきの木々の繁る庭を眺めていると、その木の葉とともに落ちる私の涙なのですよ。

【評】父伊尹の病を思いやる欝とした心情が、晩秋、時とともに暗さをます庭前の梢の繁みという対象を得て形象される。木々の繁みから落ちる木の葉の音は、父の病の悪化を気遣って涙する義孝の心と響き合うものになっている。菅根順之氏『詞花和歌集全釈』（昭五八・一〇）には、「情と景とが同時に作用し合う仕組みで自然に流れる涙が一層強く読者の心を打ち哀れである。」という評言がある。

なお、詞書に添えられた記述から本文と異本で詞書に二通りあったことがわかる。異本が示す「天禄三年の秋女のかりやる」は女とのやりとりであることを記すにとどまるが、本文「殿やみたまひしころいかゝと人のとひたるに」では詠歌の事情を明らかにする意図が見える。

また、歌の中では、傍書の示す「ふるなみたかな」も初期形と思われる。落涙を詠嘆でもって詠ずる初期形に比べて、「おつるなみたか」と疑問の形にすることで、自分にも捉えきれない悲哀の情を表現することになり父の病を思いやる悲しみをより複雑なものにしている。

【参考】『詞花和歌集』巻第十雑下、三九六に入集。詞書「一条摂政みまかりけるころよめる　少将義孝」、初句「ゆふまぐれ」、第五句「おつるなみだか」。『後葉和歌集』巻第十五哀傷、四一四では、詞書「一条摂政みまかりにける比よめる　少将藤原義孝」、初句「夕ま暮」、第五句「落る涙か」。これらの家集では伊尹の死を悼んで詠んだ歌としている。

『栄花物語』巻二「花山たづぬる中納言」には「かくて一条摂政殿の御心地例ならずのみおはしまして、水をのみきこしめせど、御歳もまだいと若うおはしまし、世知らせ給ても三年になりぬりば、さりともと頼みおぼさるゝ程に、月頃にならせ給ぬ。（中略）九月ばかりの程なり。殿の御とぶらひに、御子の義孝の少将の御許に、人（の）「御心地いかゞ」と訪ひきこえたれば、少将いひやり給ふ、／夕まぐれ木繁き庭をながめつゝ木の葉と共に落つる涙か」とある。（日本古典文学大系『栄花物語』による。以下『栄花物語』の引用は同書による。）

うせさせ給ひにし御いみはてゝ、人〳〵におはしわかるゝひとのゝ中将のもとへイ

7 後拾 いまはとてとひわかるめるむらとりの　ふるすにひとりなかむへきかな

【校異】〔一類本〕○とのゝ中将のもとへイ　ナシ（群）　とのゝ（本ノ）中将のもとへイ（本文ニ続イテ同ジ大キサデ記ス）（清）　とのゝ中将のもとへイ（本文ニ続イテ同ジ大キサデ記ス）（榊・京、但シ京ハ「イ」ナシ）○後拾　ナシ（群）　〔二類本〕○うせさせ給ひにし　うせたまひて（正・甲）　うせ給てのち（乙・丙）　○御いみはてゝ　いみはてゝ（乙・丙）○人〳〵に　みな人〳〵（正・甲）　人〳〵（乙・丙）　○おはしわかるゝひ　たちわかるゝに（正・甲）　行わかるゝひ（乙・丙）　○とのゝ中将のもとへイ　ナシ（全）　○後拾　ナシ（正・乙・丙）　○わかるめる　わかるめり（正・甲）　○ひとり　ナシ（乙・丙）　○なかむ　すくす（乙・丙）

【語釈】○うせさせ給ひにし御いみ　父伊尹の死は天禄三年十一月一日。「いみ」は人の死後近親者が一定の期間家につつしみ籠もること。ここでの

忌みは四十九日のそれをさす。 ○**おはしわかるゝひ** 『日本紀略』天録三年十二月十七日条に「為二故大臣一於二法性寺一修二卌九日法事一」とあり、これの終わる日が忌み明けにあたったか。「おはし」は義孝に対する他者の敬意を示し、この詞書を記す段階の本集編者が義孝以外の者であることを推測させる。 ○**とのゝ中将** 8番歌の詞書に「修理かみ返し」とあり、この人物と同一。「修理かみ」は1番歌詞書から源惟正と確認できる。惟正は安和三年九月二十日から天録四年七月二十六日まで右近中将であった。なぜ「とのゝ」であるか未詳。清泉本傍書異本「本ノ」であれば、二人いる右近中将のうち前任であることを示す。 ○**いまはとてとひわかるめる** 「める」は婉曲の断定。自分を残して去り行く人をとがめる意をこの語によって和らげる。 ○**むらとりの** 群がる鳥のように父の喪に籠もっていた人々。「とひわかる」「ふるす」と縁語をなす。 ○**ふるす** 故伊尹の一条殿。○**なかむへきかな** 「べき」は当然の助動詞。故伊尹の一条殿に一人残って悲傷せねばならぬことを必然・当然のこととして確認しつつそうした自分を詠嘆している。

【題意】 父君が亡くなられ、四十九日の忌みの期間が終わり、人々にお別れになられる日 （異本 殿の中将のもとへ）

【歌意】 今は忌みの期日も果てたといってそれまで群鳥のように集っていた皆は散り散りに散りに飛び立っていきます。皆様のおられたこの古巣で私は一人悲しみに沈まねばなりません。

【評】 亡父伊尹の四十九日の法会の後、とりどりに伊尹邸を去る人々を見て、その一人でもある惟正に、残される者の孤独を訴えた歌。

【参考】 『後拾遺和歌集』巻第十哀傷、五六七に入集。詞書「一条摂政みまかりてのちのわざのことなどはててひとびとちりぢりになりはべりければ少将藤原義孝」。『後六々撰』一一八。『栄花物語』巻二「花山たづぬる中納言」には「今はとて人〳〵まかづるに、よしたかの少将の詠み給／今はとてとび別れぬるむらとりの古巣にひとりながむべきかな 修理大夫惟正返し、／翼ならぶ鳥となりては契るとも人忘れずばかれじとぞ思ふ」とあり、第二句「とび別れぬる」となっている。

「わかる」「むらとり」「ふるす」の語を詠み入れた後代の歌としては、『清輔集』四三二に「かたがたになきてわかれしむら鳥は古巣にだにもかへりやはする」（範成卿）がある。

修理かみ返し（これたゝ）

8 はねならふとりとなりてはちきるとも きみわすれすはうれしとそ（わかれもわすれし）おもふ

【校異】〔一類本〕○修理かみ（これたゝ） 修理のかみ（これたゝ）（清） 修理のかみ（群） ○ちき（わか）るとも 契るとも（群） わかる（ちきる）とも（京） ○うれしと（われもわすれし） そおもふ 嬉しとそ思ふ（群） 我もわすれし（うれしとそ思ふイ）（京） 〔二類本〕○修理かみ返し（これたゝ） すりのかみこれたかゝ返し（正・甲） ナシ（乙・丙） ○となりては ともなりて（正・甲） ○ちき（わか）る 契（正・甲） わたる（乙・丙） ○うれしと（われもわすれし） そおもふ われもわすれし（正・甲） かれしとそおもふ（乙・丙）

【語釈】 ○**はねならふ** 『長恨歌』の「在天願作比翼鳥 在地願為連理枝」という句の比翼の鳥を連想しがちだが、ここでそう考えると意味不通となる。前歌の「とひわかるめるむらとりの」を受けて、忌み明けにそれまで忌み籠もりをしていた人々が翼をならべるようにしてこぞって義孝のいる故伊尹邸を離れることととるべきである。伊尹邸を離れた一人として惟正がいた。 ○**とりとなりては** 「は」は条件を示し、第四句の「きみわすれすは」の「は」と二つの条件句を有することとなり、このままでは不通。誤写がある

か。私見では書陵部蔵正安本・同甲本の「ともなりて」もしくは「とはなりて」がより正しい形と考える。そのうちでも「とはなりて」が穏当か。「ともなりて」の「も」や「とはなりて」の「は」は「と」と混同しやすく、「とも（は）なりて」→「ととなりて」→「となりて」と変化し続く第三句が傍書のように「わかるとも」とあったものが「わ」を「は」と誤ったことと呼応して「となりては」の表記となったか。　**○ちきるとも**　本来傍書のように「わかるとも」もしくは「わかるれと」とあったものが「はねならふ」のもつ比翼の鳥の意味連想から「ちきる」の語が求められて、「ちきるとも」となったのではないか。「わかるれと」であったとすれば「わ」は「となりては」の「は」となり、「か」「る」→「ち」、「れ」→「き」などと誤読され、結局「ちきるとも」となった経緯が推測される。この推測は九州大学蔵本当該箇所の「ちきる」の字体より容易に行うことができる。　**○うれしとそおもふ**　古巣を離れる惟正の方で「うれし」というのはややそぐわない。「う」と「か」は誤りやすく「かれしとそおもふ」であったとするのが妥当。

【題意】　修理の大夫（源惟正）の返歌

【歌意】　羽を並べて古巣を離れる鳥のようにお邸をおいとまはしましたが、あなたが私を忘れないで下されば（私の心は）あなたと疎遠になることはいたすまいと思っています。（仮に「はねならふとりとはなりてわかるれときみわすれすはかれしとそおもふ」の本文で解釈）

【評】　義孝の歌に応えて惟正が交誼を約束する歌。傍書から判断して下句の初期形は「きみわすれすはわれもわすれし」とあった。それが改撰で「かれしとそおもふ」と改められたとすれば、その「かれじ」という意志を更に「おもふ」で確認し係り結びにして惟正が強く誼みを約束するものになったといえる。

なお、『栄花物語』では、この歌を掲げる件りの直前、義孝が伊尹の死を悼んで道心を深くしたが、幼い愛息（後の行成）の見捨て難さに出家をとどまった由の記事が見え、伊尹の死の衝撃が大きかったことを示している。

【参考】　前歌【参考】に示したように、『栄花物語』巻二「花山たづぬる中納言」に「翼ならぶ鳥となりては契るとも人忘れずはかれじとぞ思ふ」という本文で掲出。同書では「うれし」ではなく「かれし」の本文をとっている。この歌について『栄花物語全注釈』では『栄花物語詳解』の「試にいはば、羽ならふは、羽をならす事にて、飛び習ふの意。かれじは、離れじにて、疎遠にせぬ意。目かれなどの、かれに同じ。さて、御忌もはてたれば、一条殿を退りて、思ふかたに立帰り、君としばし別れまゐらすれど、この上ともに、君のわが事を忘れ給はぬならば、我も決して君を疎遠に思はじとなるべし。」という説を上げつつ「無理」とし、口訳に掲げた「（摂政殿には死別したが、その忘れ形見のあなたと）私は比翼の鳥となって契りを結ぼうとも、それ以外の事は考えない、それ故あなたさえ私をお忘れなさらぬならば、（私からあなたのおそばを）離れることはしますまい。」という解を「穏やかでない」としつつも妥当としている。

傍書を生かした「きみわすれすはわれもわすれし」の表現は、後の「ちはやぶるかものやしろの神もきけ君わすれずはわれもわすれじ」（『千載和歌集』巻第十五恋五、九〇九、馬内侍）に例が見いだせる。

春、人のよめといひしに

9　夢ならてゆめなることをなけきつゝ　はるのはかなきものをもふかな

【校異】〔一類本〕○なけき（おもふには）つゝ　歎きつゝ（群）　おもふには（なけきつゝイ）（京）　〔二類本〕○春人の　はるかしらけつらせて人〳〵（正・甲）　○いひしに　いひしかは（正・甲）　いふに（乙・丙）　○なけき（おもふには）つゝ　思ひつゝ（全）　○ものおもふかな　ことをみるかな（正・甲）　ものをこそおもへ（乙・丙）

【語釈】○**夢ならてゆめなること**　実際は夢ではないが、夢の如く思いがけない現実。前年（天禄三年）十一月の伊尹の死をさす。　○**はかなきもの**　「夢」と「はかなし」の語を詠み込んだ歌としては、「夢よりもはかなき物は夏の夜の暁がたの別なりけり」（『後撰和歌集』巻第四夏一七〇、壬生忠岑）、「夢よりもはかなきものはかげろふのほのかに見えしかげにぞありける」（『拾遺和歌集』巻第十二恋二、七三三、よみ人知らず）などがある。

【題意】　春、人が詠めといったので

【歌意】　夢ではないのに夢の中のことのように悲しいことを嘆いて、この春、身にしみてもの思いをしています。

【評】　伊尹の死の翌春の哀傷の歌。10で「はるかせのそらなるほと」「むめのはな」とあり、その前に位置することから、年が改まってすぐの頃の詠か。ものみなが萌え出る明るい春に取り残されるように義孝は悲しみに沈んでいる。傍書「おもふには」を生かした歌にすると、「おもふ」が一首中二語となり不自然。下句「ものおもふかな」にも傍書が付されていたものが筆写の段階で書き落とされたか、または「ものおもふかな」を上句の表現と見誤り傍書に残ることになったか。正安本・甲本では詞書「はるかしらけつらせて人〳〵」とあるが、10の歌と詞書を混同したものか。

とのかくれ給てのあくるとしの春御前のこうはひイ

はる、かしらけつらせて、みな人〳〵よめといひしに、むめのはな
おもしろくあるところを

10　はるかせのそらなるほとはむめのはな　こすゑこそなをうしろめたけれ

【校異】〔一類本〕○とのかくれ給てのあくるとしの春御前のこうはひイナシ（群）　とのかくれ給てのあくるとしの春イ（京）　○けつらせて「け」字補入（底本）　○続古ノ集付アリ（榊・群・京）　○こそなを　こそなを（の外も香に）（榊）　○うし（心ほそ）ろめたけれ　うしろめた（心ほそ）けれ（匂ひつゝ）（榊）　うしろめたけれ（群）　うしろ（こゝろほそけれイ）めたけれ（京）　〔二類本〕○とのかくれ給てのあくるとしの春御前のこうはひイ　はるかしらけつらせてみな人〳〵よめといひしに　ナシ（全）　○むめのはな　梅のいと（正・甲）　○おもしろくあるところを　おもしろきをみて（正・甲）　おもしろし（乙・丙）　○続古ノ集付アリ（甲）　○こそなを　こそなをこゝろほそけれ（のほかもかにゝほひつゝとあり）（甲）　○うし（心ほそけれ）ろめた　心ほそけれ（全）

【語釈】○**みな人〳〵**　「かしらけつ」るという内輪の場で詠歌の要請をされたのであり、亡き伊尹の邸に仕える女房たちのことをさすか。　○**はるかせのそらなるほと**　春風が空高く吹いていてまだ地上近くを吹かない春浅い時節。　○**うしろめたけれ**　「うしろめたし」は、気がかりだ、気づかわしい、気が許せないの意。

【題意】　春、髪を梳らせて、その際人々がみなで歌を詠めというので、梅の花が趣深く咲く風景を（異本　父の摂政殿がお亡くなりになって翌年の春、お邸の前の紅梅）

【歌意】　春風が空高く吹いてまだ梅の花に吹かない今、その寒さの中で咲く梢は何といっても気がかりなことだ。

【評】　毎年咲く梅の花が今年も美しく咲き出ているが、今年の場合は例年同様の寒中の開花に気がかりなものを感じている。その梅は亡き父の邸宅の庭に咲くものであり、父の逝去を悲しみ父の面影を求める心が、年あらたまってよみがえる花に慰めの対象を見いだして、その花を気遣うのである。傍書の「心ほそけれ」は心に頼りなく感じること。当初「心ほそけれ」とあったものを「うしろめたけれ」と変えることで伊尹の不在の悲しみを梅の花に託す心持ちが強く表現されることになる。

【参考】『続古今和歌集』巻第一春上、六四に入集。詞書「梅の花の歌として　藤原義孝」、第四・五句「こずゑのほかもかににほひつつ」。一首の歌意は春風により空高くまで梅の花の香りが運ばれる早春の景を示す。『和漢兼作集』（巻第一春上七三）、『秋風和歌集』（巻第一、六四）、『別本和漢兼作集』（巻第八、四二九）にも、下句「こずゑのほかもかににほひつつ」として掲げられる（詞書「題しらず　藤原義孝」）。

11　はるくのはなをあたにとみしものを　むかしの人のゆめこゝちする

【校異】〔一類本〕ナシ　〔二類本〕○「又」ノ詞書アリ（正・甲）　○はるくの　春の野の（正・甲）　はるくと（乙・丙）　○はなを　はなを　は（乙・丙）　○あたにと　あたに（乙・丙）　○むかしの人の　いまはむかしの（乙・丙）　○こゝちする　こゝろなる（乙・丙）

【語釈】○**はるくのはな**　「はるはるの花はちるともさきぬべしまたあひがたき人のよぞうき」（『大和物語』七一段、『三条右大臣集』三五）の例がある。なお、二類本「春の野の」は、一類本「はるくの（はるゝの）」を「はるのゝ」と誤写した故の異文と認められる。意味としても、「一年一年めぐり来る春（の花）」ということで、二類本「春の野の花」よりも、一類本が妥当といえる。　○**あだ**　うわついたさま。　○**むかしの人**　亡くなった人。ここでは父伊尹をさす。　○**ゆめこゝち**　「ゆめこころ」と同じ。夢を見ているような心持ち。

【歌意】今まで年ごとの春に咲く花をあだめいたものとみていたものだが、今春のこの花には、昔の人（父君）の蘇りのような夢の心地がすることだ。

【評】ストイックな心性をもつ義孝の目に、父の死を契機として「あだ」なる桜の花が新たな意味をもって映るようになった感慨を詠みあげたもの。『大和物語』歌の、花は毎年咲くが亡き人は帰らないという趣向とは別に、自然の花々を亡き父の蘇りとして眺める義孝の感受性を見るべきであろう。その感性は寒中に咲く梅花を気遣う前歌にも同様に認められるところである。

人のもとよりかへりてつとめて

12　後拾　きみためをしからさりしいのちさへ　なかくもかなとおもほゆるかな

【校異】〔一類本〕○後拾　ナシ（群）　○おもほゆ（ひぬ）るかな　おもほゆる（ひぬイ）かな（清）　おもひけるかな（群）　おもひぬるかな（京）　〔二類本〕○後拾　後（正）　ナシ（乙・丙）　○つとめて　ナシ（正・甲）　○おもほゆ（ひぬ）るかな　おもひけるかな（正・甲）　思ひぬるかな（乙・丙）

【語釈】○**人のもとよりかへりてつとめて**　後朝の歌であることを示す。　○**きみかため**　あなたとの逢瀬の願いがかなうためならば。　○**をしからざりしいのちさへ**　惜しいとも思わなかった命さえ。「さへ」は添加の副助詞。あなたに逢いたい上にという前提の存在を示す。上句は「命やは何ぞは露のあだものを逢うにし換へば惜しからなくに」（『古今和歌集』巻第十二恋二、六一五、友則）の発想を受ける。　○**なかくもかなとおもほゆるかな**　「もかな」は願望の終助詞。「おもほゆ（る）」は「思ふ」の自発形、自然と思われる。（かつては惜しいと思わなかった）命が長く続いてほしいと思うようになった、の意。

【題意】ある人のところから帰って、早朝に

【歌意】あなたと逢うためなら惜しいとは思わなかった私の命でさえも逢っての後の今は長く続いてほしいと思われることです。

【評】後朝の歌。念願の恋のかなったとき、新たに恋人との逢瀬の願いが生への未練としてわき上がるという心理の変化を詠う。この着想は、『万葉集』巻第十二、二八八〇「恋乍毛　後将相跡　思許増　己命乎　長欲為例

（こひつつものちにあはむとおもへこそおのがいのちをながくほりすれ）」や、後代の『新古今和歌集』巻第十三恋三、一一五二「きのふまであふにしかへばとおもひしをけふは命のをしくもあるかな」（廉義公）にも同様にみられることが指摘されるが、万葉集歌に比べては、逢瀬を機として心の変化を劇的に詠う内実になっており、また昨日と今日の心の対比に自らの恋心を内省的に詠む新古今歌集に比べては、恋人への高らかな呼びかけに若者の純粋さが読み取れる。金子武雄氏（『小倉百人一首詳講』（昭四一・一）は、類歌に対して「表現の洗練」を指摘されるが、田辺聖子氏が「しらべも美しく切実な情趣があって」と評される（『田辺聖子の小倉百人一首』昭六一・一〇）こともこれと同じ趣意のものか。なお平野由紀子氏に異説があり、来世を希求していたはずが、愛する女の存在を実感した刹那から、現世をいとおしむように変化したという解をされる（参照　有吉保氏『百人一首全訳注』昭五八・一一）。　傍書では「おもひぬるかな」の本文を示す。その現実体験に発する表現が「おもほゆるかな」に改められた。我が命の長かれとの願いが相手の女性との逢瀬の後のいっときの感慨として捉えられたものが、「おもほゆるかな」に変わることで、その願いが今も持続し「ずっと思っている」ことを表わす意になった。

【参考】　『後拾遺和歌集』巻第十二恋二、六六九に入集。詞書「をんなのもとよりかへりてつかはしける　少将藤原義孝」。第五句「おもひぬるかな」。『百人秀歌』（四九）『二八要集』（恋三）でも第五句「おもひぬるかな」とある。『百人一首』（五〇）『後六々撰』（一一七）『新時代不同歌合』（一二八）では第五句「おもひけるかな」。藤原定家は『百人一首』で、『後拾遺集』以来の「おもひぬるかな」の現実体験に発する表現よりも発見的感動の強い詠嘆を込めようとしたか。なお、『二八要集』では詞書に「人のもとにまかりそめて朝に遣わしける」とある。

ものいひし女こと人にものいふときゝて、おほかたつねはみれとも（には）
なにそはかひはかへる山と
のいはねは、なとかへるやまといひたりけれは

13　かへるやまさる〳〵しくもみえなくに　なにしか人のたちとまるへき（かは）

【校異】〔一類本〕○おほかた（には）　おほかた（清・群）　おほかたには（京）　○なとかへる（なにそはかひはかへる山と）やまと　なとかへるやま（なにかはかひはかへる山と）と（清）　なとかへるやまと（群）　なにそはかひはかへる山と（京）　○さる〳〵しくも　さか〳〵しくも（清・群）○なにし（かは）か　なにしか（群）　なにかは（しか）（京）　〔二類本〕○女こと人に　めにこと人（正・甲）　女の人に（乙・丙）　○おほかたつね（には）はみれと　おほかたにはありとみけれと（正・甲）　おほかたに（乙・丙）　○ものいはねは　物もいはねは（乙・丙）　○なとかへる（なにそはかひはかへる山と）やまと　なにそはかひはへるやまと（正）　なにそはかひは（かカ）へるやま（甲）　なにとか人返山よと（乙）　なにとか人□（帰る）山よと（丙）　○なにし（かは）か　なにかは（正・甲）　なにゝか（乙・丙）　○たちとまるへき　たちとまるらん（乙・丙）

【語釈】○**ものいひし女**　義孝がかつてことばをかけた女。宮中などに出仕する女性か。　○**こと人にものいふ**　義孝が他の女にことばをかけその女と親密さを見せているという噂を聞いたのである。　○**おほかたつねはみれとものいはねは**　義孝が先の「ものいひし女」のいる場所がわかっているのに声をかけず素通りすることが度重なったという事情が推測できる。　○**なとかへるやま**　「かへるやま」は「越前国南条郡鹿蒜郷にある。北陸道は越前の国府（武生）から敦賀津（松原駅）へ出るのに、山越えの道と海沿いの道

の二つに分かれて、海沿いの道は五幡山の麓を通り、山越えの道は、帰る山の南方を木の芽峠で越える。」（萩谷朴氏『枕草子解環一』「山は」の段の語釈による）。傍書に「なにそはかひはかへる山」とあることと同じで、「あひしれりける人のこしのくににまかりて、としへて京にまうできて又かへりける時によめる　凡河内みつね／かへる山なにぞはありてあるかひはきてもとまらぬ名にこそありけれ」（『古今和歌集』巻第八離別三八二）を踏まえる。この躬恒の歌は、「かへる山の存在する甲斐（効果）というのはその名の通りこちらへやってきても留まらないで帰ってしまうということにある」という意で、やって来てもそのまま帰る義孝の薄情さをとがめている。

○さるくしくも　「さかくし」の誤写。「さかさかし」は「険々（さがさが）し」。山が険しいさま。前掲萩谷氏によれば、帰（る）山は今の鉢伏山（標高七六二メートル）とあり、事実その高さから「険々し」とは見えない山であった。　**○なにしか**　どうしてまあ……か。

【題意】　かつてことばをかけた女が、私（義孝）が他の女性と親しくしていると伝え聞いて、「ふだんはいつもあなたのお姿を拝見していますが、何もおっしゃらないので、「などかへる山（どうしてすぐにお帰りになるのですか）」といってきたので。

【歌意】　帰る山は険しい道とはみえないのにどうして人が立ち止まらねばならないのでしょう。

【評】　かつて義孝に声をかけられたまま顧みられなくなった女から薄情さを咎める意を込めて古今歌の一部を送られたものに返した歌である。「帰る山は険しくないのだから立ち止まらずに帰るのは当然」として返している。

かへし

14　こひにのみまとへる人のこゝろには　さかくしくもみえぬなるらん

【校異】〔一類本〕○こゝろには　こころにて（清）　○さるくしくも　さかくしくも（清・群）　〔二類本〕○全文歌ナシ（乙・丙）　○こひにのみ　こよに（ひカ）のみ（甲）　こよひのみ（正）

【語釈】**○こひにのみまとへる人**　義孝をさす。　**○さかくしくもみえぬなるらん**　険しく見えるということもないでしょう。

【題意】　返しの歌

【歌意】　恋に惑うばかりの人（あなた）の心には帰る山は険しくみえることはないのでしょう。

【評】　13の義孝歌に応えた「ものいひし女」の歌。自分を顧みず帰る義孝を「こひにのみまとへる人」として、辛辣とも見える口吻で切り返している。この辛辣さは、この女性の本心か冗談味（冷やかし）のこもったものか判断し難い。「こひにのみまとへる人」とあるように、あるいは義孝に一心に通う女性が現れた故、当該歌作者の女性には「ものいはね」ということになったとも考えられる。

七月はかりに、つきのあかきに、ものいふ人のもとに（よれい）　女

15　後拾　わすれてもあるへきものをこのころは（の）　月よゝいたく人なすかせそ

【校異】〔一類本〕○あかきに（よれい）　あかきに（清・群）　あかきに（よれは）（京）　○人（女）　女（人イ）（京）　○後拾　ナシ（榊・清・群）　○わすれ（かゝら）ても　わすれても（群・京）　○このころは（の）　このころは（群）　このころの（京）　○月よゝ　月よし（京）

〔二類本〕○はかりに　はかり（乙・丙）　○つきの　つき（乙・丙）　○あかきに（よれい）ものいふ人　あかきよれいものいふ人の（正）　あかきよれいのものいふ人の（甲）　あかき夜人の（乙・丙）　○もとに　もとにて（乙・丙）　○わすれ（かゝら）ても　わすれても（全）　○月よゝいたく　月よいたく（本マヽ）（正）　月よいたく（本マヽ）（甲）

【語釈】○**わすれてもあるへきものを**　藤本一恵氏『後拾遺和歌集（四）全訳注』では「（あなたは私のことを）忘れているだろうに」、和泉古典叢書『後拾遺和歌集』（川村晃生氏）でも「私のことを忘れているだろうに」と、するが、新日本古典文学大系『後拾遺和歌集』（久保田淳・平田喜信氏校注）では「あなたのことを忘れていたらよかったのに。」と解する。傍書に見える「かゝらても」が当該歌原態を示し、改稿時「わすれても」とした際も原態の意と近い趣意を詠んだものとすれば、久保田・平田両氏による解が適切と思われる。類歌「わすれてもあるべきものをあしはらにおもひいづるのなくぞわびしき」（『古今和歌六帖』巻第五、二八七三）でもそのような意で詠まれていると認められる。『公任集』の「わすれてもあるべきものを中中に雲ますくなき月をこそ思へ」（三三四）は両様にとれる。「べき」は適当。

○**このころは**　「は」は「このころ（初秋七月中旬の時節）」を特立させる。

○**人なすかせそ**　「人」は自分をさす。「すかす」は心をかき立ててその気にさせる、の意。あの人を恋う私の想いをかき立てて誘い出してくれるな。

【題意】　七月のころ月の明るい折に、ことばを交わす女のところに

【歌意】　あの人のことを忘れていたらよかったのに、このごろは月夜よたいそうに私を誘うことはよしてくれ。

【評】　相手の女性を恋慕する葛藤を初秋の月に促されたものとして詠み、逢瀬を求める求愛の歌。月に訴える形をもって恋人に贈っている。この後相手の女性からの返歌を待って彼女のもとを訪れたものか。傍書による初句「かゝらても」ではそれが第四・五句の内容を受け、下句まで詠んで初めて「かゝる」の内実が理解できるものであったのを、本文のように変えることでより明快な内容になった。詞書傍書では「……つきのあかきよれいもいふ女……」となるが、「れい」とあることでこの女性への通いが重なって日常的になった意にとれ、それを避けて恋情の新鮮味を確保するため「れい」を削除したものか。

前掲久保田・平田氏注では、「月夜よし夜よしと人に告げやらば来てふに似たり待たずしもあらず」（『古今和歌集』巻第十四恋四、六九二、よみ人しらず）を念頭に置いて言外に「訪れてもいいか」という心を含む、とする。

『後拾遺集』収載当該歌をめぐって諸注「誹諧的」性格を指摘するが、その上で藤本一恵氏は「道心も厚かったまじめな性格の義孝には、作歌動機におどけや滑稽などあったわけではない」とされる。現実の生真面目さをもって「おどけや滑稽」の要素の否定の解に短絡させることには問題があるが、本歌の場合、「人なすかせそ」ということばに義孝の求心的ともいえる恋の誠心を読むことは可能であろう。

【参考】『後拾遺和歌集』巻第二十雑六、一二一二に入集。詞書に「七月ばかりに月のあかかりける夜女のもとにつかはしける　少将藤原義孝」。第三句は「このごろの」。

ことゝもおもはぬ女（とま）の、ものいひかけしかは（つねに）

16　むめかえにゆきもつもらぬはるなれは　このしたつゆやつねにつゆけき

【校異】〔一類本〕○もの（つねに）　もの（いねに）（清）　もの（群）　○つも（とま）らぬ　つもらぬ（群）　○はるなれは　はるはれは（京）

〔二類本〕○おもはぬ　おほえぬ（乙・丙）　○女の　めの（正・甲）　人の（乙・丙）　○もの（つねに）　つねにもの（全）　○いひかけしかは　いひかくるに（乙・丙）　○つも（とま）らぬ　とまらぬ（全）

【語釈】○**ことゝもおもはぬ女**　取り立てて好ましく思わない女。　○**ゆきもつもらぬ**　梅の枝に春近く降る雪という取り合わせは、『後撰集』巻第八「むめがえにふりおける雪を春近みめのうちつけに花かとぞ見る」（四九七、よみ人しらず）などがあり、そうした詠歌の発想を踏まえて、春になり梅の

枝に雪も積もらぬようになった景を詠う。また、「ゆき」に「雪」と「行き」を懸けており、春になって梅の枝に雪が留まり積もるほどでないことと、相手の女性への訪れ（行き）がさほど度重なっているわけではないことの意味を重ねる。　○**このしたつゆやつねにつゆけき**　「や……つゆけき」で反語。木の下が露で濡れそぼっていることはない、といい、「ものいひかけ」る女の嘆きの訴えの不当なことを述べる。「木の下露」は、『古今和歌集』巻第二十の「みさぶらひみかさと申せ宮木ののこのしたつゆはあめにまされり」（東歌のみちのくうた、一〇九一）を踏まえる。

【題意】　格別にも思っていない女がことばをかけてきたので

【歌意】　梅の枝に雪も積もらない春になっていますので、その木の下は雪のためにいつもぬれているということがありましょうか。（あなたに訪れを重ねてもおりませんので、私が訪ねぬ今、あなたはさほど露けく過ごしてはおりますまい。）

【評】　相手の歌に応じて義孝が詠んだものと思われる。春暖の候の、雪も枝に留まらぬ梅の姿を表に詠みつつ、訪れを重ねて親密になったわけでもないので今疎遠になっても涙でそぼつ露けさはあるまい、として相手の女性の嘆きの当たらないことをいう。疎遠を訴える相手に対して突き放した冷ややかな印象の歌である。

うちわたりにてものいひし女の、たえてのちうらみけれは、

17　あふさかやたひゆく人もしのはらに　ひとよはやとりとらぬものかは

【校異】〔一類本〕ナシ　〔二類本〕○ものいひし　かたらひし（全）　○女の　女（正・甲）　○人も　人の（正・甲）　○ひとよは　ひとよか（甲、高橋氏ノ翻刻ニヨル。田坂氏ハ「ひとよの」トスル。）　○やとり　やとに（正・甲）

【語釈】○**うちわたりにてものいひし女**　内裏のあたりでことばをかけ親密になった女。　○**たえてのちうらみけれは**　仲らいが絶えて後、恨みごとをいってきたので。　○**あふさかや**　逢坂。女性との逢瀬を暗示する。　○**たひゆく人もしのはらに**　「たひゆく人」は義孝をさし、「しのはら（篠竹の生えた原）は相手の女性をさす。「しのはら」と「たひゆく人」の取り合わせは、後撰時代の歌人源仲正の「しのはらやさののくくたちさかなにてたび行く人をしひとどめばや」（『夫木和歌抄』巻第二十二雑部四、九九五七）にみられる。　○**ひとよはやとりとらぬものかは**　一晩ほどは宿りをとらないことがあろうか。「ものいひし」ことが一晩限りで終えるほどの相手であったことの言明である。

【題意】　内裏のあたりでことばを交わした女が一度疎遠になった後恨み言をいってきたので

【歌意】　逢坂を越えて旅行く人も篠原に一晩ほどは宿をとらないことがありましょうか。（私は一夜の宿りのごとくあなたとひとときことばを交わしただけなのですよ。）

【評】　ひととき親しく交際した女性に対して「一晩くらいは親密にすることがあるのです」とは辛辣な物言いであるが、それは詠歌による社交としての辛辣さであったか、またこのように詠ませるものが女側の「うらみ」ごとの中にあったものか。この、女性との淡泊な交際の根底に、ストイックな精神性を読むことも可能である。

【参考】　『夫木和歌抄』巻第二十二雑四、九九五六に入集。第二句「たひ行く人の」、第四句「ひとよもやとり」。